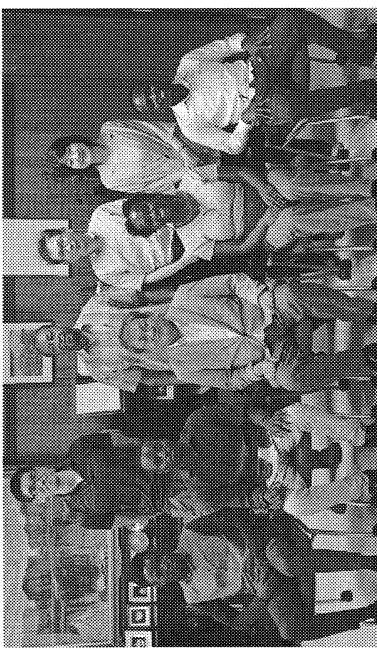


=山口大学=

ケニア・ナイロビ大学生が学長表敬



谷澤学長(前列中央)、ナイロビ大学生5

山口大学では9月8日、ケニアのナイロビ大学生による谷澤幸生学長への表敬訪問が山口大学吉田キャンパスで行われた。

山口大学は現在、文部科学省世界展開力強化事業の一環として、ナイロビ大学との学生間交流によりグローバルな視点から学ぶことでOER(Open Educational Resources)の実践に貢献できる人材の育成に取り組んでいる。

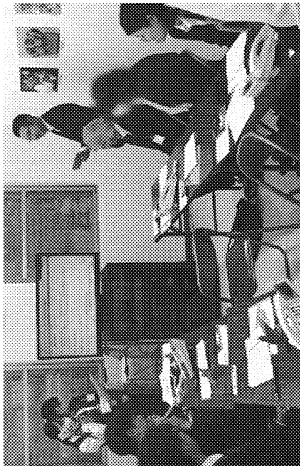
今年度はナイロビ大学獣医学部4年生4名とギタウ教授の計5名が来日し、9月4日から15日までの2週間、山口大学共同獣医学部で学生間交流、施設見学、および動物感染症総合集習に参加した。

来日5日目のナイロビ大学生は、習いたての日本語で一人一人が自己紹介をし、日本の印象やケニアとの違いについて話すなど、終始和やかな雰囲気の中で学長との会話を楽しんだ。またギタウ教授から、大学間交流をより深めるためのいくつかの提案があり、今後学術的にアフリカとのつながりを構築していくことを目標とする山口大学にとっても、大変有意義な懇談となった。

山口大学

工学部学生と学長との懇談会

工学部学生と学長との懇談会



電話対応の実習をする留学生インターン。本企業について学びを深めたほか、銀行員と一緒に日本の折り紙体験もした。

広島銀行では、現場を見学し業務について学ぶとともに、挨拶、電話対応などの講習を受け、実践を行った。

実習のための部屋には、留学生インターンを歓迎する飾り付けがされ、銀行員に温かく迎えられた。中国からの元留学生であり、広島銀行で活躍する先輩の話にも耳を傾け、日

広島大学では11月10日、「グローバルインターンシップⅡ：地域と協働する異文化間実習」(担当：森戸国際高等教育学院 恒松直美准教授)の授業において、留学生インターン7人(アメリカ、イギリス、ドイツ、中国、台湾出身)が広島銀行西条南支店で実習を行った。

広島大、広島銀行で

留学生インターンが実習

山口大、干ばつが及ぼす

パンコムギ種子への影子的影響の解明

近年の気候変動によるパンコムギ生産地を直撃する干ばつの影響は、農作物減収の主要要因となっており、世界で増え続ける人口を養うため食糧の生産と確保が懸念されている。また、パンコムギは種子成熟期にストレスがかかると、種子の品質が損なわれ、商品価値が下がってしまうことが懸念されている。

そこで、山口大学の妻鹿良亮准教授らの研究チームは、耐乾性に関与するアブシシン酸(ABA)受容体をパンコムギの植物体内で多く作らせた、遺伝子組換え体の耐乾性系統(トランスジェニック)とそうでない系統(コントロール)について、開花1週間後の種子成熟過程の植物に乾燥ストレスを意図的に与えることで、成熟途上種子が受ける影響を調べた。

その結果、小麦粉の品質を左右する種子貯蔵タンパク質の主要構成アミノ酸であるプロリンが乾燥ストレス下でもトランスジェニックに多く存在することが判明。一方で、コントロール系統はトランスジェニックほどプロリンの存在量が増加せず、結実する種子もトランスジェニックと比較すると小さく、種子貯蔵タンパク質もトランスジェニックの方が多い。種子の形成に必要な成分の蓄積が、非ストレス下と変わらないことが重要であることが示唆された。

同研究成果は、干ばつ下においても品質を維持できるパンコムギ系統開発の際の育種目標となる形質について明らかにし、極端化する気候変動に対応できる系統開発に一石を投じると期待される。

学科・学年、出身地、所属している課外活動団体、現在特に力を入れている勉強や部活動などの諸活動に関する自己紹介があった。